

昭和六十年九月二十三日

場所 東京駅近く喫茶店

会談者 安東日明(ひめさん)(速記録ではA)

文京守(ヨシオ)(速記録ではY)

杉山常好(速記録ではS)

録音テープ速記録

甲第118号証

作成 有限会社 大阪速記者

S 今度は大変やったな。

Y そうですねん。

S な。兄貴、この前東京に来たときに、おれ聞いたんや。

Y ああ、そうらしいですな。

S ええ。えらい事故したんや言うて。

A 自分の兄貴、えらいもうけとるやんけ。

S どの兄貴。

A 上の兄貴や。

S うちの兄貴か。

A おう。

S おれも長いこと、ここで二年ほど会ってないけど、不渡り食うて往生してると言うてた。

Y 兄さん三人いますのんか。兄さんとはよう会いますねんで、背の低いほうの兄さん。

S すぐ上の兄貴か。

A そやそや。

Y 兄さん何人いますのん。

S 兄貴三人おるよ。

Y 三人。ほな背の小さい、酒の好きな人いますやろ。顔の丸こい。

S そうだ、そうだ。色の黒い。

Y 色黒いか、白いか。よう会いますねん、私。風呂行って会うし、飲みにも、行ってもちらっと会うからね。

S そしたら、二番目の兄貴や。

Y ああ。ああそだったか。

S 一番真面目な兄貴。

A おまえ、杉山化学やな、えらいもうけてるねんな。わし、冷コーちようだい。

Y 私も。

S ここら冷コー言うてもわからへん。

A ああ、そう。

S アイスコーヒー言わなな。

Y それは、そらそうでつせ。

S 東京へ出て来た当時は、いつもと同じような感覚でな、冷コーちゃん言うたら、はあ、言いよつた。いや、冷コー言うたら、はあ言つて。それで、わしも長いこと兄貴とこ連絡してないねんけど。

Y そうですねん。一月ごろ、なんや来るようなこと言うとつた。

S そやそや。そやから、行ってないねん。全然行ってないねん。親の法事も二回とも行ってないねん。毎年行つとつたんやけどな。ちようど、去年の十月ごろから、もうガタガタ、ガタガタしとつてん

や、店がな。あんまりええことなくて。

A 何や三軒ほど持つてるて聞いたでえ。

S おちめなこと言うけどな、なに、二カ所あった、二カ所。二カ所あったものの、一カ所はな、これからやと思う時に全焼や。

A 燃えたん。

S ああ。で、木造の貸店舗やったからやな、保険も何も入れへんかってん。放火みたいなもんやな、あれ。裏が焼けてな、周りからゴトゴトとされてもなあ。

A それもたまらんな。

S あれがケチのつき初めや。そんなうわき聞けへんかったか。そんなうわきを聞けへんかったかな。おれの兄貴が、二、三千万不渡り食ったとか。

A 聞けへんかったぞ。

S おれはそんなこと聞いたことあるねん。おれ、兄貴のほうへ迷惑かけとるから、電話するのんも気づつなあなつてもうてな。

A それでな、他にもないねんけどな、全部言うけど真二の件でな。今銀行とな、やってるやん、永和の。もうはつきり言うて、その資料なんかがな、いっばい出てくると、どうしても自分の名前が出てくるわけや、物事がな。で、まあとにかく、自分の個人攻撃とか、そんなん抜きでな。そんなんしでいま銀行とほぼな、八〇%はわかつとるわけや、流れ全部。で、この前四国行って、桧垣おるやろ。桧

垣。

S 貸付におったやろ。

A ああ、それにも、流れを聞いたんや。聞いたらな、末益が、その取立て手形を預つとるわけや。それ、割引くとかそういうやつは、全部もう桧垣が預つとるわけや。そやけども、依頼返却というな、判こがようけ押してあるわ。本人に返つたんと違うわけや。全部それ内部操作でな、末益から割引きに回るにしても、依頼返却の判こを押しよるわけや。それで末益が、手形が消えるはな、内部で何んぼでも消えるわけや。逆に紙で、手形で、こつちが割引くことできるし、逆に今度手形さえあればな、どこでも、どこの口座でも、言うたら使えるわけや。そういうことが、まあ桧垣のあれで、まあわかったわけや。

S あのな、あの、おっさんにも何回も言うとするよ、真二にも何回も言うとするけども、ここまできたらな、あの、おっさん自身がな、兄貴自身がな、おれをどう思おうが、かめへんと。おれはな、かめへんと。ただしな、おれが出て行ってな、おっさんが有利になるのんやったら、おれ出て行ったるよ。逃げも隠れもせん。な。ただしな、そこでまあ、おれも気分悪いと、その後の順序を説明したらな、真二自身がな、ちよつとでもおれをやな、疑つたんかな思うたら、おれ情けないと。

Y そやけどうちの兄貴がやな、やっぱり兄さんにやね、裏切られた思うたら、やっぱりうちの兄貴があまりにもかわいそうです。やっぱり一番友達やつたんや。あの杉山さんが一番友達やつた。

S あの、いつでもな、そういう言い方したらな、おれもおもろないんや、な。

Y だけど、資料ようやっていたら、あの……。

S だから、

Y やっていったらやな、杉山さんがやっぱし名前が出てきますがな、やっぱり書類上でも、で、

うちの兄さんが親元、担保入れたん、兄さんが保証人になりましたんか。

S いや、保証人になんかなってないよ。

Y なってませんやろ。

S ええ。

Y それがなってますねん。

S だからな、その話とか、あの話とかな。いろいろ、ややこしい問題いっぱいあるよ。兄貴の話聞

いてもな。ただな、今、ヨシオでもそうや。な。兄貴もそうかもわからん。おれの顔見ておれのこと言

わんかもわからんけど、おれに十分言い分持つてるかもわからんやろ。な。おれが何かした思うてるの

と違うかなと思うてるかもわからんけどな、それだけはな、おれが腹切つてもな、な、あの、言葉だけ

じゃないよ。おれがちよつとでもてんごしとるんやったらな、なあ、おれが腹切つたる言うねん、真二

にな。ただし、そうじゃなしにな、おれが言いたいのは、ここまできて、どうであれこうであれな、お

れが出て行っておっさん有利になるんやったら、おれいつでも出て行くと。な。ただしな、おれが

ちよつとでもチヨロマカしたとか、そういうような気持ちだけ持つなよと、あまりに情けないと。おれ

自身もな。

A いやいや、決してそうじゃない。

S いや、ほんと。

A そうじゃない。あのな、だから、そこでな、言えることは、それ自分の、自分のな、つこてる手形がな。

S おれの。

A おう。自分の手形が、前のやつ安田のやつとかな、こういう紙がな、真二とこへな、依頼返却で出てきたり。そやから金伊三雄あるやん、石本、石本の手形が自分とこに回ったりな、してくるわけや。そんなんいっぱい出てきたから、ここでな、もう（録音中断）……でな。（録音中断）……わからんわけや。おれが……で……と末益と。ところが長いことやってたらな、内部のやつらとやつとる件で、向こうにな、（録音中断）……その、どないなっとるか、それわからんわけや。（録音中断）……ところがな、この間自分が言うふしのな、腹切ってというな、意味がわかるわけや、はっきり言うて。

S それだけわな。

A そや、わかる。

S どうしてもな。それだけはな、その話横に置いててもかめへんけどな、おれの気持ちだけはわかっ
てくれな。

A それはね、その意味はわかるわけや、ところがな、結局そういうふしで、そんなんが出てきよるから、どうしてもな。そんなら一遍な、何でやと。何でそんなら、そんなん……。そんなでそこへも

つてきてな、これ、あの……。

S あの一番最初のな、この話したらな、おれももう、これは全然もう頭にもなかつたことやけどな。おれがちょうど中川の家へおれが買うていった時や。買うていって間なしにな、間なしに、あの、向こうの支店長から電話あつたんや。な。そんなら、吉川さんの、日明さんが仲かんで真二と、向こうの金庫へ向こうへいってきて往生してるんですわと。何でや言うて。いや、わけのわからんことで、こうこうである、日明さんら来て、ガタガタされてますんをやと。一回一応まあ杉山さんにな、耳入れとこ思うて電話したけどと。部長は警察でもすぐ呼んだらしまいやからと。だから、ちよつと待てと。だから一回、支店長、晩でもうちへ来いや言うて。そしたら向こうのあれが、桧垣か誰か、おれははっきり覚えてないねん、家へ来いや言うたら家へ来よつたんや。二人か三人ぐらい来よつたわ。そんなことあれへん、話したらちゃんわかるのと違うのかというんで。その後、おっさんから電話あつたわけやな。それで何でや言うて。いや、おれがおらん間に、もう、そのおかしいと。そんならすぐにおっさんとこ行くわ言うて、おれ家に行ったことあるねん、マンションにな。マンションに行った時に、その話やつてるのが、その、まあ真二自身の勘違いもあるん違うかなという。おれは半分そういう気持ちもあつたし。銀行というのおれは間違いないとこやおれも思うとつたし。その当時は。そんならな、おっさん、今でもな、まだこれも何年も経ってへんから、今までのん、全部のな、資料出させ言うて。あの、一番最初からのな、流れのやつ、みんな向こうに報告書あるねんからな、全部出させと言うて、それを出さしたわけや。出さして二、三日行ったり来たりしとつたんや、向こ

うに。な。その後に、何やかんやしてるうちに、おれが飛んでもうたわけや、な。それも、おれがちよつとでも疑われてるいうふしは、いっこもなかったわけや。その時点ではな。で、おれが飛んでもうて、どこや、京都行って、そんでまた平野のほうへ帰って来たんや。まあ仕事があるからいうことで帰って来て。そうこうやってる間、おれが平野へ来た時でも、自分の兄弟のどこ、どこも電話もしてないねん。二年間ぐらいはどっこも電話してないわけや。それで、そんなことで清とおれが連絡したんかな。それでその兄貴の話聞いたわけや。杉山のうわきで、お金を喰うて逃げてるとおっさんは言うてると。そんならもう、おれ自身が辛抱できんようになってやな。あの、ちようど四月ごろかな。あの、おふくろの、おれが法事に来たとき、。とにかくあれや、清にすぐ出て来いや、布施で会おう言うて。布施のちっちゃなスナックで会うたん。それも十二時半頃や。パゼ（韓国語、法事）全部終わってからな。おれ自身の気持ちとしては、もう情けなくなつてな。あの、すぐちよつと真二とこ電話せえや言うて。そんで真二を呼んだわけや。十二時半か一時ごろや。その時も初めておれ、兄貴と会った時にな、あの、いきさつは何も聞いてないよ。ただな、おっさんら、おれが、そんな人間や思うて今まで付き合いつたんか言うてな。おれ、そない思うたらほんま情けないねん。おれ、いまこじきしとるけどな、そんなこと、おっさん思われてる思うたらな、そんな情けなあてしゃあないわ言うて。その時に、まあいろんな話して、まあ銀行へ行つて調べ、調べてみるわ言うことだな。それやったら一回調べやと。な、ただし、ほんまにな、今、あの、日明さんの前で言うけどな、おれもそのぐらい腹は持つてるいうことだな。

でな。そんな金おれがどないして食うねん言うて。そこんこよう、あれしてからまた調べや言うて。で、一番最後、そうやって別れとるねん。その後にもう弁護士入どのこののやつてると。だから何回も電話で、何回も会って、そこで会って。電話でも話しして。本当はおれ、二月に行くと言うとつたんや、な。それまでに弁護士全部あれして。わかったと、それでわかったんやつたらおっさんのほうから、とにかくおれのためにそれしてくれや言うからな。それやつたらほな動こうと。ただし、証拠固めやとか、そんなんきちつとしとけよと、こつちでな。こつちで全部して。また、おれの性分が、嘘でもなつても何でもかめへんと、おれがこう言うてくれたらええ言うのんやつたら、おれは何ぼでもしたると、な。ただし、おれの性分だけはわかってくれ言うて。な、おっさんに疑われてな、そこへノコノコな、おれはそんなんようせん言うたんねん、な。ただまあ現実的にな、まあ銀行のほうと今こう調べてる段階でな、おれいう人間がチヨロマカしたいう形になつとるのか、おれどうか知らんよ。おれは知らんけどな、ほんまにあの、銀行にもおれ借金あるねんや。何ぼか残ってるわけや。おれの保証人はあれ、清になっているからな。その話も聞いた。清も往生した言うたけれどもな。それは前におれも言うたことがあるんやけどな。だからその話しが清のほうでどうなつとるのか。この詳しい話しをおれも聞いてないねん。おれの負債がどうなつて、どういうようにストップきいとるのかな、それもおれは全然聞いてないけどな。それだけなかったからな、何ぼでおまえ、向こうの誰や支店長な、谷肇か。桧垣なんか、おれ、あんまり親しくないねん。あんまり個人的にいろんな話したことないねん、桧垣は。支店長はね、や

っぱり飲みにつれたりゴルフも行ったりとったけども。他の未益とか、そんなんは名前は知ってるけど、あんまりおれは親しく話したことないねん。

A 結局はな、立岩というのがおるわけや。

S 立岩というのはおった。

A ほな立岩がな、まあ一つの仲介やねん。これまあ、はっきり言ってな、自分の手形がな、この依頼返却、当座にな、資料もみんな入ってきよったわけや。それがな。それをおかしいやないかと、この手形を真二は知らんと。そんならこれは、誰のやというたら杉山さんのんやと。そんならこれが、まあ後でまた消えてくるわけや。あの、消してきよるわけや。それで、今言うた物件な、家の保証人、自分なったことないのに。

S なったことないよ。

A ないのに、もう出てきて裁判でも違うと言うたわけやねん、その杉山自身がなってないとな、はつきり証言してな……………。

S ただな、おれは、おっさんの保証人いうたらおかしいけど、あの……………。

A 一番初めの契約書はだれや。

S 手形割引した時あったやろ。その時にあれ為替やねん、保証人とかな。その時の保証人だけの話や、要は。

Y そうそう。家のあれには保証人になってまへんねん。

S おれはなっていないと思うな。

Y あれも、そやけど銀行にはなつてまへんねんやろ。

A ところがな、だからその名前書いてある、あそこらね。ところが字がね、向こうの字やねん。それだな、それで桧垣に聞いたたら、桧垣言うのは、……。

S ほな、あの家で何ぼ借りたんもおれ知らんもん。

A そうそう、家も知らんと思うわ。ところが、おっさんもなつてないと言うとるねん、今はね。ところがや、その字がな、おっさんの字や、杉山の字や。そんなら向こう言うたように……。

S それは何、その何や字を、家のその担保に対しての。

A そうそう、保証人、連帯保証人。

S ほな、ついとるわけ。

A うん、そうそう。

S ほなそのこと知つとるわけ。

A そうそう、連帯保証人や。それで、判こは押してあるわけや、名前と判こが押してあるわけや。

ところが割印とな、割印とあれは押してないわと。で、印鑑証明はないわけやね。普通は保証人なつたら、印鑑証明みなとられるわけや。こら、桧垣に言わたら、あの、前に自分がやったあの当座した時の件の印鑑証明の。それを、あの、合せてやってると、そういう具合に逃げよつたけどもな。ほな、それはおまえがおつてな、ほなおまえが書いてもろうたんかと、こら聞いたらな、いや、誰かが、私

は知りませんと。それは、谷支店長と杉山さんがよう会うてると、会うてこういうしてたと。それ、それ
もしたんが、その物件を言うて来たんが谷から言うてきたいうわけ、桧垣は、知らんいうわけや、
はつきり言うてな。そんならまあ、……。

S その物件入れたんは、いつごろ入れてるね。

A あれが、あの……。

S おれがまだおる時の、もちろんそうやわな。

A そうそう、おる時。ちょうど自分が飛ぶちよつと前や。

S それは……。

A それ、それとな、金伊三雄の手形がや、自分、それでも真二と話した思うけども、手形がな、
あのくらいに自分が持込んで真二に割っててもうたんや、例えばの話。そうすると、手形が自分とこ
行ってや、その手形が自分が石本に取立てしたわな。石本のほな、普通やったら、それは真二に返る
手形がやな、何でな、自分とこへ回ったか。

S おれとこへ。

A おう。それをな、不思議やん。だからおれが今言うふしで、この時の流れがあるからひよつとし
たら自分とこに回っててもて、また向こうさんの銀行のミスで返しんか、それはわかれへんもん。

S 何やて。おれが持込んだ手形が真二の口座で割つとるわけ。

A 違う違う、違う違う。自分が、あの石本の手形を、あれ信二に割ってくれて渡したんやろ、石本

の手形を。それ、真二が割ったりよったんや。ところが不渡りになったやん。不渡りになって、それでまあ買戻しせないかんやん。はつきり言うて。ところが、その紙自体がや、自分のとこへ渡して、な、その買戻しはもう自分がしたそうや。

S　まあ、そのことはな、記憶はちよつとこうないかもわからんけど。ただ、あの真二とな、おれとの貸借とかあるやんか。おれの手形を割ったり、あの割ってもらったり、金の行ったり来たりのやつはな、真二とのやつは、こげついているやつはいつこもないねん。

A　ないねん。それ、ないけれども、その手形がや、普通やったら真二とこに残つてんならん手形が、自分とこに返つてや。はつきり言うて真二が自分に渡してんやつたら、これまあ、説明のつくわけや。

S　ああ、はあはあ。それはまた、どこから来てるんいうわけか。

A　そうそう、そうそう。それでな、その時にはつきり言うて、あの、真二が強調しよった思うことは、真二とこのお母さんが死んだ時に、な、自分と、まあいい争いして別れてやな、一遍も会うてないや。真二とは。あの当時な。そんで、その当時、その当時に後にこれ不渡りになった紙やからな、それが普通やったら真二から杉山の手に渡って自分の手で渡したんあったら、これは辻つま合うわけや。ところが真二が返してもらいもせんかった手形がな、自分とこへ行って、で自分から、石本に、これはまあ取立てしてるわけやねん。そんならこの紙はな、一体どっから回ったんかと、まあ、個々に一つの疑問が出てきたわけや。こら、はつきり言うて、ひよつとしたら自分、自分の手形や思うて、銀行のやつが間違うて渡したので、銀行の、そこがわからへんわけや。それで長こうなつとるわけや。

S そうなると、おれがそれを食うてもうとるんか。

A いや、それは誰だかわかれへんわけや、そのへんがな。そこが今一つのポイントになつとるわけや。何でか言うたら、内部のやつが渡さんことにはやな、はつきり言うて自分の手元に渡ることないわけや。ところが、おれが銀行とするねん。ほな、間違うて真二に返さばあかんやつを、自分に渡してもうたかもわかれへんわけや、これがな。

S それは結果的にな、それは真二からもろうて、おれが真二からもろうてるかもわからん。

A いや、それやったらな、それやったら辻つま合うねんけども。その当時は、自分とやな、真二といつこもな、会うてない時やから。な、全然結局あのあれ、お母さんの葬式の時に、そのちよつと前にやな、自分と物別れになってけんかなって、いつこも会うてないやん。それで、自分が葬式は行つたわな。まあそれは言うつたわ。うれしかったと。そやけどそれからいつこも会うてないのにやな、手形も渡すこともなけりや、何もないと。

S おっさんとは何回かな、鶴橋でしゃべらんかて、何回かあんねん。

A そうそう。その間にな、その間に手形が自分とこへ回ってくるからな。それが何でやると。それでな、それで真二言うのは、わしが渡したもんやったらわかると。そらわしも手形返してもうてないのにな。ところがこの手形用紙、依頼返却でな、真二に返したことになるわな。この紙があつてな。そんなら銀行言うのは、もう真二に返したと言うけれども、ところが、その手形自身が自分とこにあつてな、自分のほうから取り立て行つとるのや。

S そやけどそれはな、よう考えてみや。それが、まあこっちのほうへ返ったとせえや、手形をな。返ったとしても、真二のおっさんからや、取立てに行くこと自体おかしい、違うか。

A 違う。

S そら手形は、おれが持って行つとるわけやからな。

A しかし、それはわからん。

S 当然真二やったら、おれとこへ言いに来るやんか。この手形不渡りや言うて言うて来るんと違うか。ところが、やつぱり保証人になるおれが、ケツふけ言うたらケツふくで。

A そら、わかるやん。ところがや、その紙が、真二が受け取りもせえへんのに、そらお金の貸借は済んでるやん。タカイのん、不渡りになったぞと。これはええやん、例えばの話。ほなそれで自分が買い戻すわとこうなったら、これでもう話は、これで済むやん。ところが普通やったら真二とこへ手形返つてきてや、自分にこう渡してや、それで正当やねん。ところがその紙を真二に返らんと、自分とこに直接な、行つとるからな、何でそんなおかしなことになるんやと。

S それはもう間違いないわけやな。

A 間違いないねん。

S 真二がその後受け取ってないのは間違いないわな。

A ああ、そうそう。間違いないわけ。だから、それでな、自分がその手形をもろた時な、誰にもろたんかな。それ、それをな、ちよつと思ひ出して欲しいな思うてな。それ、そないなったら、すぐわ

かるわけや。ということとは、いろんな真二の手形がな、全部依頼返却になってあるわけや。今言うふしで。これは桧垣が説明してくれよったんが、依頼返却というのは末益が取立て手形は全部扱ってるんやと。ところが、おれが真二とするやん、なあ、取立てと割引と持込むわな、手形三枚やったら三枚。ほな、割引のほうは末益とこへ……。取立てのほうは末益とこへ行つて、割引きのほうは桧垣が割りよるわけや。な。ほな今度、立岩が、勝手にや、吉川真二から割引きに回してくれと、こよう言うてたいうて、末益とこへ行きよるわけや。末益とこへ行つたら、取立て手形や。ほなそれを一旦依頼返却ということ、桧垣とこに回るわけやな。その紙がな。ほな、そうなつてきたら、当人に返したん違う、内部的に依頼返却いうて当人に返したようにしてやってな、それで真二の手形がな、消えとるわけやわけや、羽根が生えたように。割引きもかけてくれと、言うたことない手形も割引きかかるとるわけやねん。それでこれが、やつとこの意味がわかって、依頼返却いうのが。桧垣が言うのは、これは内部でしますから、全部が返つたん違いますと。な、内部で一旦そういう逆戻りするんやという、そういうことなんで。それやつたらどこの当座でも使えるし、そのまま期日までやな、使うといても行けるし。またその上で、その手形を、持込んだそのままポケットに入れることもできると、こよういふことになってきたん。ほな、ほな桧垣が言うのは、桧垣が言うのは、谷支店長な、谷支店長をなにしたら、呼んで直に話聞くのが一番早いという。それはな、谷支店長が全部知つてやつとることやと、これは。ほなところが、何で自分にこんな話聞くと、大体、そういうふうなことで保証にもなつてないもん、保証になつたりや。そういう今の……。

S 例えはな、今の手形の話でも、こっちが勝手に向こうが割引いてきたりな、しとるわな。銀行側では割つとるわけやろ。割つとるわけやろ。

A 割つとるわ。

S その金はどこへ行つてん。

A 一旦入るやん。

S 真二とこへ。

A 真二とこへ入るもん。ほなそこからな、出金伝票あるやろ。わけのわからん、三百二十万とか、百二十万と出してな、勝手に出金されとるわけや。ほな、ところがその桧垣が、桧垣と違うてその立岩は、これもつて帰った人間はな、真二でもなけりやヨシオでもない。ここの家族じゃないから、その、その人の名前は言えませんが、真二とてな、真二という具合にな。

S それがおれやということになつてゐるわけやな。

A 違ふ違ふ、違ふ違ふ。自分じゃないねん。おれらはな、自分がその現金の取り込みしたことはいつことも言うてないわけや。それは、立岩らがしとることはな、ほぼわかつたるけども。ところが手形のな、はっきり言うて一番使い易いのは、例えの話や、自分の当座使わしてもらたらや、銀行のやつが、悪いことしよう思つたら、当座を使わしてもらたら、真二の手形そういう依頼返却にしてやで、割引きにかけるんやつたら、はっきりいうて、真二の手形そういう依頼返却にしてやれ連れて行って向こうで契約さしとるやろ、ある意味で。だから、それが全然知らん人がな、内部の

やつがしようと思うたって、自分の知らんやつなの、当座をな、使うことでけへんやろ。真二の知らんところを。

S ああ、そう。

A ところが、そういう手形がな、他で、な、期日まで割引きたり。それで期日になったら、こう入ってくるわけやな。別段預金で落ち込みがあつたら、そこからはまたすぐ入金が入ったり、こういう形。ところが、全部じゃないわけやねん。中には、取立手形が勝手にやな、消えてもて、現金もなくなったりするわけや、な。そんならそうなってきたら、結局むしろがその、何で杉山自身がやな、保証もなつたことない。な、こんなんが押したりや、こっちの依頼返却して……、みんな帳簿とつたらやな、自分の手形が、自分の手形、手形があるやん。それがこっちな、名前が出てきたりや。な。何でそんな、あんまりにもようけ出てきたから。それで、それでや、石本の手形が、何で自分とこへ回つたかと。な。それで一遍、聞いてみたら一番。ということは、自分に何も個人攻撃したり、そんなんやなしに、今銀行を、徹底してやっつてしまおうと思うて、それで自分もそれで、こっちの弁護士が何回か裏で小細工しよつたんや。はっきり言うけど。

S その銀行いうのは谷が一番よう知つとるいうわけやな。

A そういうことや。だから、谷が一番よく知つとるわ。なぜ谷が知つとるか、こいつがな采配振つとるわな。それ、これ二グループあるねん。今言うたうちのな、現金のな、取込みと、手形のな、手形の件はな、はっきり言うわ、な、谷がやつとるわけや。

S あのかな、そしたらな、あの、おれと、その谷支店長か、会うたら一番早いん違うの。そんならそれもう、あの、かめへんがな、支店長に、真二も、早ような、あの、会う時間作れよと、もう飛んで行くよ。

A そないするか。

Y ええ、そんなうちの兄貴も、杉山さん疑うのは寂しい気持ちやし。また杉山さんも、うちの兄貴がそう思うてるのは、やはり寂しい気持ちでしょうな。

S あたり前や。

A ところがな、あんまり自分の名前が出てくるからな、もうついな。

S そんなもん、違うねん。兄貴な、兄貴も、おれも兄貴の性格わからんことないで。

Y いや、自分もその話を聞いたん最近でんねんや。

S おれも、おれもな、兄貴の性格もわからんことないで。で、何回も電話で話やったけどな、東京まで出て来ておれと話しとることあるんやけど、あの、ほんまにまた一口でな、今の話聞いてもややこしいで。

A そら、ややこしい。

S おれ自身がな、おれ自身が今聞いても、わからんこともようけあるねん。

A そらある。ある。

S ただな、おれが、自分自身が言えることは、おれがどつちかいって、おれがチヨロマカしてやつ

たことはないのやから、おのれ自身はな。だからそこで誰かが本当に、兄貴の金盗つとるのやったら
な、それは究明したらなあかんしな。で、それで一番早いのが今、石本の手形、はっきり依頼返却で
三百二十万して誰かが持つて行ったとか。

A うん。

S そんなこと言われても、おれも全然もうおれ自身が、わからんことやし。な。ただ一番早い方法
は、どないしたら一番早いんかな。その支店長とおれが会って話やって。それでコラツ、こんなことか
と。おれは言つてやりたいよ、文句。な、言えたらええねんけども。ただ、おれも迷惑かけとるから。

A それはわかるよ。

S 自分に対してもな。それが、まだあと、おれ自身が、またそれ、まあ出て行って、まあ話出てた
けども。まあそういう点があつて、それだけですまされるのであつて。ただ、もうそのことはかめへん
と。もう、その話聞いてたらな。そこまでやつぱりおれとこに来て、兄貴も来て、谷も来てな、それは
もうほんまにどないか、白黒つけてもらわな、おれ自身もな。ほんまにこれどつかで、おれでも死んで
もうたら、そんなん、おまえ、おれもいややしな、いや、ほんとに。

Y そやから、それでね、兄貴の気持ちもわかったってほしいねん。

S うん、わかるねん。また、それで……。

Y うちの兄貴も杉山さんを疑うさびしさと、やつぱり杉山さんもやつぱりうちの兄貴がそう思うて
る、そのくやしさと寂しさも……。

S わかる、わかる。

A そやからな、はっきり言うわ。その内部でな。自分の名前をな、上手にな、利用してや、このおっさんの手形をな、うまいことな、詐取したいうことになるわけや。意味わかるやろ。谷いう人間にはつきり言うたように、腹かち割つてでもと。この気持ちも、これはわかる。はっきり言つて。

S おれがおっさんの金一円でもおれが食うとつたらな、おれは……。

A いや、わかるよ。ほな、ところがな。

Y 正直言うて、うちの兄貴は、杉山さんしか、友達いてまへんでしたがな、その時期言うたら。そうでつしやる。

S ほんまやな。

A だから、そういう意味でね。ところがそういうことがながれが出て来たらな、結局誰かが、自分が信二の当座組んだ時、自分やん。自分が紹介したやつちや。誰かがそういうふうなことしとるわけや。

S それは、まあ早い話がな。その、銀行の、それは谷か誰か知らんけども、来て。それこそ自由にな、話したら、おれがここで何ぼ何やかんや言うても、始まらん話やし。

A そら、そうや、そうや。

S ただ、自分自身の気持ちかな、何回も言うように、その、おれのような人間でも、その、ただ都落ちする時でもな、自分が都落ちする時もな、身内には迷惑かけとるけど、そんなん友達とかそんな

んには迷惑かけてそんなしたりというのは、いつこもなかったんや。だから、他のあつちの連中とかな、あつちの連中には迷惑かけとるとこ、ようけあるよ。そやけど、自分の弟の友達みたいなやつ、誰も迷惑かけてないし。だからまあ、おっさんの話聞いても、最初はもう、おれが頭にきたよ、本当に。その話聞いた時な。もう本当にもう情けないやらな。そら裏返せば、おっさんの言葉があるから、ただ杉山と友達やと思つとつたから、迷惑かけとつたんかな、思うそんな気持ちはようわかるんや。ただしまあ、ここでおれ、何回も兄貴から聞いてるけどな。まあ兄貴がどういふふうに受け止めてるかもわからんけども、そんな、おれ、ほんま、おっさんにな、そんなん思われてるだけでもな、おれはもう、ほんまにもう……。

A だからな、今言うてたんも、あの、八分どおり、きてるわけや。それでももうじつきな……。

S だからな、一番いいのは、あの、入つとる弁護士なら弁護士な、どういふ弁護士かおれ知らんけども、杉山と会うてな、杉山がいつでも出て来て話する言うのと。それで会うて自分が出て行くからにはな、杉山とどういふ話して、どういふ形になったら一番いいのか、な、答だけは作つとけと
言うわけや、な。

A そら、言う。だからまあ、どつちにしても。

S また、わしが先に来たけど、まだまだ言うわけにいかんからね。

A それがどつちにしても、自分のことを証人で申請しとるわけや。まあその時来てな、まあはつきり言うて、そういふこと聞きよつた時にな、まあ言うたつてほしいわけや、はつきり言うて。この前

も、はっきり言うて、あのいつこもな、桧垣がな、保証なつてないもはっきり言うてるねんな、なんでこれ保証になつとると。ほな、書いてますよと、こういうな。ほな、おかしいことばかり言いよるわけだ。それがためにな、おかしいのは本人にやな、このこと聞いてきてやで、弁護士に質問さしたわけや。当人がなつてないのに、何でこうなつてんねんやと。いや、支店長に言われてんと。そやから、その、家の抵当入れたとき、支店長はやな、支店長が桧垣に言うて、吉川がやな、物件を出させと。そんなら真二がはっきり言うたらしいわ。

S いや、おっさんもそれこの前に言うてつてんやん。おれから何も家のこと言うてないのにな、あの時もおかしかったんや言うて。な。家を担保に、担保に入れて、担保に入れて金を貸したる言うてな、言われてたんや言うて、兄貴もそない言うてた。

A それでもおかしい。二回にお金入つたるねん。初め五百万やつたんや。ほな、後三百万また、真二の兄貴の名前でな、三百万な、当座組んでやな、放りこんで来とるわけや。はっきり言うて八百万入れとるわ、あの家で。普通やつたら絶対出んわけよ。ところが、はっきり言うて、

自分でもそうやし、おれでもそうやけど、依頼返却の手形がな、全部で約三千万ほどあつたらな、誰でも行くやろ言うねん。その手形もろたら。

S そやけど要するに何や、その、短期間、まあ一カ月なら一カ月、一週間なら一週間じゃなしに、長時間で金を抜かれてるといわけやな、兄貴の。

A そうそう。もう当初からね。当初から、もうそういうな、当座がな、変てこになって行つとるわ

けやな。

Y 結局はな、あんな遊び出したいのんが一番あかんと思いますねんけどな。まあそやから話、ちやんと終わってね、まあ兄貴も杉山さんとこ、遊びに行くぐらいの気持ちになって、杉山さんでも大阪に来たら、うちの兄貴とやね、会えるような気持ちになれば、うちの兄貴もやっぱり納得しよるわけですよ。うちの兄貴の性格いうたらああいいう性格やからね。やっぱりうちの兄貴友達いうたら、杉山さんしかいてまへんでしたがな、正直言うたら。そうでっしやる。やっぱり……。

S いやいや、もうあの時もな、おれ自身もそうや。今でもそう思うとるよ、何かの間違いや、何かの間違いやと思っとるよ。

Y ええ。

S この話聞いてからでもな、弁護士も入って、そんでやれと、やってきれいにあれせえやと、おれ何回も言うた時にな、何かの間違いで、まああっさんの勘違いやるとおれはそう思うとったんや、おれはな。

Y ええ。

S 銀行の中で、そんなもん、おまえ、金なんか食うやつおれへんわと。おれの正直な気持ちや、な。おれはそう思うとったんや。

Y ええ。

S ところが、まあおれも、もう日にちも長いしやな、こうなってきたら、ああおっさんも、や

つぱりよっぽど確信があつてやつとるねんなど。おれ自身もそう思うとるから、ただ、おれがな、あの、まあ何回も言うように、おれがチヨロマカしてやつとると、な、思うのが一つと、な、まあこのこれやな、支店長か、支店長とおれが組んでやったん違うかなという疑惑は持つとると思うねんよ、兄貴自身がな。おれに言わしたらな、そんなあほなこと、絶対ないよと。だからここで、まあ真二自身がな、まあ弁護士といろいろ相談してね、まあどういふ角度でやつたら、一番その、おっさんが納得して、銀行をギャフンと言わせるのんか。そういうことを考えたほうがおれはええと思うねん。

Y だからね、今、もう八分どおりきとるわけですわ。後は、やつぱり杉山さんに力になつてもらふものは力になつてもらわんことにはやね。

S だから……。

Y やつぱり知ってる、知らんは別にしてね、知ってる面は、正直に言うてね、

S おれ、みんな言うたるよ。

Y ええ、ええ。

S 何もおれ、銀行のことでおれが隠すこと一つもあれへん。

Y ええ。だからね、今で八分どおりきとるからね、やつぱりもう、正直言うてうちの兄貴も今そういう状態でやね、もう何もしてないわけですわ、もう神経がそういう、とにかくもう銀行の件しか、もうないわけですわ。

A もう、十何年やね。

S そうや、そうでしょう。

A なにして。

S そら、そうなるやん、おれが出て十年以上になるねんで。

Y だからもう、意地でも、金を捨ててでも、やっぱりもうこれだけはもう、解決したいいう頭ですわ。

A だからはっきり言うて、結局内部で二組おるわけやねん。現金の詐取した者とな、手形をこれした者とな。それで桧垣と、桧垣違うわ、立岩と立岩の嫁はん、あれ出納係や、嫁はん出納係やこれ。

立岩が書いてね、裏でな、やった嫁はんがチェック押すだけやからな、お金は何ぼでも出せるわな、立岩でな。

S だから……。要するにそれがな、そんな出した金とか、そんな金が、みんなおれとこに来てるんかど。

A そうじゃない。

S そうじゃなしに、そういうとこが食うてるという可能性があるというわけやな。

A そうそう。だから、だから今言うふしで、そのな、要らんことしてるやつが、金伊三雄の手形、石本の手形をや、自分に渡したやつが、これははっきり言うで、ある程度そういう要らんことしてるから、自分とこへ渡しとるわけや。意味わかるやろ。それがな、今、あそこ誰が渡したか、これは言いよれへんわけや、銀行は。おれが不思議に思うのは、真二がもうてない手形が何で自分のとこへ回

ったかと。ほな、これがわかったらな、これ渡しよったやつ、問い詰めたら、絶対わかってくるからな。それで、手形あるやん、結局割引になるやん。しんなら別段預金いうてこれ、言うて、ほんまやったら別段預金にお金入らんやらつな、鉛筆でペケしよるやん。ペケにしたら、それでな、現金持帰えりになつてもうとるわけや。だから、このことも今桧垣が全部教えてくれたわけや。で、桧垣は逃げよったわけや。私は知らんと、私は一匹狼やと。これは谷支店長やと、それで支店長と話したら早いのと違いますかと。それでクビになりよつてん。桧垣が。なぜクビになつたかというて、この事件あつてからクビになつたわけや。左遷されてすぐな。そやんで、そんなんで。

S それクビになつたいうけどね、今そんなら、このなにや、永和信用におれへんのか。

A おれへん、おれへん。今もう四国に帰つとる。

S サラリーマンしとるのか。

A サラリーマン。だからそんなんでな。あの店長な、はっきり言うて桧垣が一番あの……。……。かな。あれや、桧垣が一番……。そういうことでわけが、わかって……。そこがそういう　　はおつて、

谷支店長……。 (テープ反転)

A ……結局力を借りてや、もう完璧にしてもうてや、もうこの銀行を徹底してな。それで今の団体も、ある程度部落解放同盟の、全同和会、そういう団体も作つてな、一つの運動のな、そんなことのみなして行つとるわけやな。そんなんでな、みな、もう徹底してな、もう銀行つぶしてしまふと。それと云うんが、その、この真二のだけはな、ビシつとしてもらうという、まあここまで来とるわけや。

そらまあ、正直言うてみな、何でな。だから今度自分に証人に出て来てくれた時に、はっきり言うて、自分、いつも保証人になったことのないやつな、何で誰が書くんやと。ほな、これがまた自分の名前やし、自分の判やわな。な。自分がなっていない言うて、何でな、誰が書きよつたと、こうなつてくるやろ、な。保証になつてないのに、もうそういうことな、そら、まあ言うたら、そのことも聞きたいし。今度証人に出た時にな、はっきりな、言うてほしいと。ということは、向こうからはつきり、ミスミスとばかりきとるだけな。おもしろないわけや。

S いいよ、おれ、だけど……。

A な、そんなんでな。まあはっきり言うて、谷支店長がな、鍵握つとるねん。わしが、あいつは……。

S 大阪におるねんやろ。

A 今、あの本店の偉いさんになつとる。

S 一回どこや、今里かどつかの転勤になつた時に、うちの中川の姉さんおつたやろ、あそこの家へ来とつたことあるらしいで。取引してくれ言うて、弟さんにお世話になつとるんですよ言うて。あの、あこの谷いう支店長が来てたとか。そのような話は聞いたことある。姉さんと兄貴から。それ以外は聞いたことないけどな。

A そこらへんもあの、はっきり言うて、しゃあないしな。

S しゃあないやろ。ここまで来たら、おれもやつぱり、白黒つけな、おまえ。

A そら、そうや。

Y それはお互いにな、さびしい気持ちになってもらわな。

A はつきり言うたら、真二がやつぱりおっさんと、とにかく一番の友達や思うとったし。

Y それからガツクリきてますわな。

A 自分を疑う気はなかつても、そんだけ名前がパツパラ、パツパラ出てきよつたらな。どうしてもな、な、気分的にな、そら一遍聞いたらわかるん違うか、違うかいう気持ちが強うなつてもうてやな。

S ただな、まあ真二でもそうや。おれがよう考えたらな、会うても、電話で話やつても、おっさん自身がな、おれに、ガーツと突つ込んで聞きたいことあつても、辛抱して抑えてな、あの、遠慮してもの言うとつたな、言いよつたんやなど、今は思うんや。

A そう思うわ。

S うん、おれはそう思うで。

A そやからな、

S な、どつかに疑惑、おれに対する疑惑いっぱいあつてもな、まあ、そうじゃないやろいう気持ちがあつたから、おれの顔見ても、本当はまあな、おれが人から聞いた話では、もう全然違うよ、会うて話したらな。そやからおれも、会うて話してから、そらおまえ、兄さんに対して、杉山さん、そんなら何や言うて言うたほうが、「何じゃ、こら」いうてけんかでもしたらもう、そのほうがまだスッキリするかもわからんけども、そうじゃないと。ただ、おれも真二にはおれの気持ちをわかつてくれと。おれの気持ちわかつてくれと、いうことしか言われへんしな。

A うん。

S だから、なんか、まあおれもわびしいよ。それ以上に、まあ真二のほうがわびしいかもわからんし。だから最終的にな、いつでもええよ、出て行くし、真二のためにあったらかまへんからな。

A いや、そないしたってくれたらな、

S そのかわりに、何回も言うように、まあ弁護士にもよう言うて、行ったら要点な、どういうことを言うて、どれを、あの、なるように、こう水かけ論じゃなしに。

A そうそう。

S あの、きちつとして。そして、最終的にな、まああの、おれ思うのは、最終的におっさんがここまでもう銀行に対していろんなこう、しよっちゅう何年かやってきたんやったら、もうそういう気持ちがあるのんやったら、また弁護士とよう相談して。どういふふうに言うたら、おれはどういふふうに言うたらおっさんの顔立つねんと、おれは言いたいわけや。ただ、その誰や、支店長とか、おれ知ってる人間、おれがちよつとでもこれは疑惑の待たれるようなことをおれのことをしゃべりやがってんと、おれは言いたいんよ、な。何でおれの名前がここでなんで出てくるんじやと、おれはほんまに、怒鳴ったるよ、ほんまに。

Y そんなん言うたら、うちの兄貴もやっぱり心強うなりまっしゃろ。

S いやいや、ほんと。おれは行ったら、ほんまにそない言いますよ。何でおれの名前が出てくるんじや、コラー、言うて。おれはほんまにな、コラー、一〇円玉一つもおれごまかしたんか、こ

ここで言えとか言うて、はっきり言うたるわ。ほんま。それともそれは、おれもそうやで。銀行がな、おれを利用して、そないなことをしてな、疑惑な、なるようなことをぬかしたのか。な。金を、本当にその金を誰かが食ってやな、おれいう人間がおらん、おらんようになったらちようどええわ、と
思うておれのほうへやな、何か仕向けたんか、ほんまに何人か組んで。

A いや、だから今、いうふしね。だから杉山の名前、結局うまいこと利用してね、そういう手形をな、これをやつとるからやな、そういうようになってきた思うわけや。だから、そうでなかつたらな、はっきり言うて、普通にな。ちよつとな、当座みたいなん使えることないんや、はっきり言うて。そんなん言うて。そんで取立手形、これはまあ期日までなら、使えるわな、そんなんしたケースがあつて。ほんで……。

S だけどおれが、おっさんを向こうへ紹介してやな、おれが飛ぶまで何年やな、三年か四年ぐらいと違うんか。

A その間にも、あらかた……。

S 五年も六年もなつてないねん。

A なつてない。だから……。

S おふくろが、おふくろが亡くなった時にな、まあ今から言うたら、もう何年になるねん。十五、六年になるのんか。

Y うちのおふくろでつか。

S うん。

A 十五、六年にはなれへん。

S なれへんやろ。

Y それまでの間ですな。十年ちよつとぐらいと違いますか。

S 十年ちよつとか。何でや。おれがおらんようになってからもう十年になるよ。十一年ぐらいになる。

A そやから、今この問題起こる……。

S おれがこないなつて十年以上過ぎとるからな、あのあつさんがあれやねん、あそこの銀行と取引を本当にしだしたんは、おふくろが亡くなった時や。その時にな、おふくろが……。

Y おふくろが亡くなったんが、四十六年やから、四十七年ぐらいやな。そやから十三年か、そのぐらいになつてははずや。

S そうや。それやったらな、三年間ぐらいの間やで。

A そうそう、三年間ぐらいの間にそないなつとるねん。

S だから、その当初な、おふくろが入院した時や、今里のな。

Y ええ。

S その時に、あの、真二話あるつて言われてるねん言うから、そんなら、一緒に行こうか言うて、一緒に行つてん。おれもな。その時に、おれと真二しかいなかったん。な。だから、あそこの押入れ

の中に、お仏壇の中にな、お金あるから、それでおまえ金貸してな、あの家きれいにしたってくれい
う話やったんや、な。

Y はあはあ。

S な。そんならもう百万か二百万の金や思うとったわけや。おっさんとおれが一緒に行つて、一緒
に開けたんや、な。もう、ペタツとした金や。何十年も貯めとった金や。いうことで、めくるのに往
生したんや、いや本当。それが九百何万あつた。一千万に足らんかつたんや、おそらくな。それを銀
行に預けて、何いうんかな、三つぐらい、三つか四つぐらい分けたと思うんや。定期するのにな。そ
れで、そんならおれの手形割るわいう話で、その手形割引きの保証人になつたわけや、その時にな。
その時の事情ちゆうのは、もうあの、誰やな、谷がよう知つとるよ、こっちの部屋に行つて、そのお
母さんがもう遺言みたいな形で、そういうあれで昔から貯めた金やというような形で、もう向こうで
清算したら、有つたんやから。そやから、それから何年間の間やから、言うてみたら。

Y だから、實際が、兄貴は病院に入院やつてましたやろ。肝臓かどつか悪い言うて。

S だからおれは、それも知らなかつたんや。後にわかつたんやで、おれは。

A ちようど違うねんな。

S あの、それもな、真二にしたらおれがボケてたから、おっさん、おれがな、そうしたとかいうこ
とかもわからんけど、おれは實際にあおのっさんから、そのちよつとおかしなつたんやと、出て来て
からわかつたんよ、おれも。

Y ああ。

S 病院入院してる時は全然おれ、知らなかったんやから。本当、入院やつとったいうのも、そんなんも全然知らなかった。で、その頃肝臓悪いとか、なんやかんや言うて入院してるいうのは聞いたけど、おれは今まで全然知らなかったんや。出て来てからわかったんや。だから、まあ最終的に、何回ここでしゃべってもな、あの、同じこっちゃけど。今ここであの、そこでおれ言うたことは、まああの、いずれにしても何にしても、それだけようわかっとして。

A ようわかってるよ。

S 話飛ぶようやけども。

A それでまた……

Y そいうことを言うてくれたら、うちの兄貴もまだ心強うなりよるからね。

S 兄貴にも、この前も言うたんやで。

Y ええ。

S おれの疑惑は……。

Y そやけど、調べていくたんびにね、杉山さんの、名前が出て来るわけですわ。とにかく。

A それはな、

S だから、そのへんな、だからそれは、支店長とか、銀行関係の人間におれが会って、おっさんの前でも話せんことには。

Y そうです。

S あの、まあ何回も言うように、おっさんには、おれの気持ちはな、おれの疑惑は横に置いてな、何でもおれ聞くから、あの、おっさんに、おれが出て行って、おれが出て行って役に立つんやったら、おれはいつでも出て行くから。

Y うん。

S その話は、兄貴も知っとるねんけどな。

A それが、自分がおった時にな、その銀行のやつでな、誰かな、そういうおかしなな、やつがおったらまた、思い出してくれたらええやん。

S おれはどう……。

A いや、自分がまあ……

S 桧垣なんかでもな、ほんまは、あれとは一度も、桧垣とは一度もないねん。おれに対してるのは、ほんまに支店長だけや。

A それがな、

S いや、本当やで。個人的にいうのはおかしいけど、銀行行っただって、支店長にしか、おれ話してへんもん。

A 結局な、自分とこの、

S 割る時は、支店長に、ちよつと、これ割ってくれや、言うてな。

A 自分とこの係、誰や。

S おれの係て言うたらおかしいけど。

A 自分とこの家へ来たりな、出入りしとったやつは誰やねん。

S 一番最初来てたんは、誰やったか立岩さんか。立岩て言うたんかな。

A じゃ、その立岩。

S いや、自分の記憶にあるのはな、あの立岩とか、末益とかな。

A 勝原か。

S 何人かおったけど、そんなんいつも相手にしてへん。そんなんはもう、ろくに物言うたこともない。

A 自分はまあ、あの谷支店長とな。

S そう、そう。

A それはみなわかつとるわけや。

S おう。

A ところが、係がおつてな。そやから係のやつが結局な、うまいこと利用しよ思うたら、できんことないから、意味わかるやろ。

S 桧垣なんかはまだ、あの、誰や、清さんのほうが親しかったんや、清はすぐ引きあげて行きよつたけどな、そんな話したこともあるよ。そんなあほな、支店長ちゃんと話せえやとゆうたこともある

よ。

A 自分、立岩と、立岩の嫁はんとな。

S 一緒になったんも、おれ知らんかった。

A いや…

S 後で。

A 後で、いや後で結婚しよってん。

S ああ、そうか。

A 自分がおった時はまだや。それがな、判こ、こうしよるやつちや。ほんまに、ややこしいこと、いっぱい出て来とるわけや。そやから、まあ一つ、今度証人出廷してな、申請あった時や、そのことこな、また言うたってくれ、強調して。わしがこんなもんな……。

S 証人出廷も、それもするけどな、その前に一回、その、その谷とかき、何人かこう、寄れるんやったら寄ってから一遍話するよ。

A それはかめへん。

S おう。

A それはかめへん。

S どないなってるねん、これは一体どういうことや。

A それやったら、あの、はっきり言ってな、自分からや、谷支店長にな、電話かけてやで、一遍こ

のぐらいな、おれの名前よう出とるのんどういうこつちやと。一遍、そんなら真二呼ぶし、一遍三人やったら三人で話しようとな。ということは、おれが何でな、保証なつてないのに、何で保証の判押したりやな、名前、おれの名前書いてあんねんと言うてくれたらええわけや。ということは、この話が支店長から出てる話や。これはもうはつきり言う。桧垣もはつきりな、支店長から言われて、そういうようにしましたと。それで、おれは桧垣に聞いたんや。ほな、おまえ、何でそんなら杉山の名前な、かいてあるねんと。なら、杉山の判こ押したあると。ほな割印もないしな。ほな、これは私知りません、支店長ですと、こう行きよつたわけや。いや、その時は、杉山さんとやな、店長と仲良かったから、まあよう出入りして、私らあんまりもの言わんけど、顔はよう知つとる、こういうようにいきよつた。

S だけど、あれ、そんならあれ、取引して、おふくろ亡くなつて、すぐ家担保にしたんかな。

A いや、もつと後やねん。

S わしは内容全然知らんかつたわけや。

A もつと後やねん。

Y わし、この話聞いたん最近やからね。

A ちようどな、自分がな、飛ぶちよつと前や。

Y そやからとにかく一番わし聞いたんは、兄貴は病院入院やつてましたやろ。その時ぐらいが、一番激しかったみたいな感じやな。

S 兄貴もおれにはそない言うもったけどな。

A 一番……や。ということは、あの病院入ったんもな、おれと一緒に、サウナ行く言うて。で、途中でな、あの天満署であの、あの天王寺署でパクられたんや。不携帯や。ほなそこで免許証持って来てくれて、そのまま行つたんや、あのサウナ行つて。帰つて来てそのあくる日に、真二入院してしまいよつてん、風引いて。その当時や、その入院している間にな、十日か、十何日や、クシヤクシヤツと、ものすごい早うなつてもうたわけやな。それから真二がやな、お金出しに行つたら、お金あれへんわけや。だから、お母さんの死ぬ前違うか。死んでからか。

S 何言うとるんや、あれは銀行が、とりあえずおふくろがもう、亡くなってからや。

A 亡くなって、あれな、取引してから。

S 亡くなる、もうほんまにわずかの前や。おれがその金は持って行つて、その時に、あの、手形預けてという形やからな。

A いや、死んでからや。そやからな、自分がな、飛ぶちよつと前や。あの、……家の抵当へ入つたんも。

S ああ。

A だから自分がおる時や。

S ああ、もちろんそうや。おれも引つかかりがあるのやからな。

Y 家の場合、杉山さんが保証人になつてない言うのに、何であないなつてますのん。

A そやそや。そやから、普通やったらな、連絡あるはずやで。ところがな、さっき言うたように、自分が言うこと、はつきり……。

S だから、おれの住所はどこになっとったん、おれの住所。

A 誰の住所。

S そやからおれの。ああ、中川か。

A 中川。

S 中川か、こっちの巽か、どっちやねん。

A 巽、巽。

S ほんなら大分前やな。

A 巽や巽や。

S マンションの住所やってんな。

A うん、そうそうそう。それで何やら化学。

S 杉山化学な。

A おう、それや。その名前でな。それで字は自分の字やねん。それで判こも自分の判こやねん。

ところが割印ないわけや。割印と、この、それで、結局、そんなら印鑑証明は言うたらな、桧垣というのは、前の自分が取引した時の印鑑証明で充当してますと、こういう具合に言いよったわけや。そして、おまえらが、書いてもろた時におまえおったんかと、こう言うたら、私は知りませんと。これ、

支店長ですと、こう言いよったからな。そやから、そんなんでな。もし、自分がもしそういうことだな、谷支店長ともう一遍会うて、話しするんやったら、一遍その……。

S そやけど、何か知つとるのんやろ。

A 知つとる。それは、あいつらも言えへん。言うたら、わが困るよ。そやから、そういういようにやつとったか。やつとわかったんが、依頼返却という、これがな、これで持った手形みたいなん、どないでもな、いわせるいうことや。

S ただ、一つな、その三百二十万の件か、さっきのやつ、誰が持って行ったか、それは私は言えませんてはつきり言いよったんやろ。

A はつきり言いよった。

S ということは、誰かが持って行ったことは、もう向こうは証明しとるわけやろ。

A 証明しとる。

S それは、谷支店長がそんなみな知つとるわけやろ。

A そこまでわし、はつきりわしらはわからんけども、な、おそらくそれはもう知つとるはずや。これ、その三百二十万だけどちがう百二十万……。

S それやったらな、おれがそう思われること、何でやはつきり聞いたら、言いよるやろ。

A 言うやろ。

S な、極端な話な。

A そやからな、そういう意味で。ところが金額、字筆違いでな。このシンがな、リッシンベンのシンがあるやろ、ヨシカワシンのシン。それでもう百二十万のお金出されとるわけや。

S おう、それ。

A 普通やったら、出ることもないわけや。ところが、これも出されとるわけや。な、ほな、現金出金で出とるやつはな、約な、七百万ぐらいあるわけや。自筆違いのやつが。何やかんやと言いもつて。七百万もないわ……、えっと三百万の百二十万の七十万の、いやあ、約五百万円ほどあるわけや。

S それは、例えばな、銀行の中におつたその、何人かおるやろ。その中の、中の人間の筆跡にはどやねん。

A 筆跡違いも、多分、あるわけや、立岩がおるもん。

S 違うやん。この書いた、四、五百万ぐらいのんあるやろ。

A おう、それ、そしたら立岩やねん。

S 立岩が書いとるわけか。

A うん。そんならこれは代筆しましたと、こういっとるわ。

S それは真二から言われてやったという。

A ああ、そういう具合に言うて。そやから真二はな、した覚えないとこう言うたかつて、結局判こが押したるわけや。

S いや、そやよつて、出して、七百万出した金はどこへ行ったんや、その金。

A みな消えてしもとる。

S だからどこに消えてもとんね、どないもでけへん。

A でけへんもん。そやから三百二十万だけは、あんまり金額が大きいから、おまえら、何んぼ金額な、小さかったらわからんけどな、三百二十万やったらな、金額大きいからわかるやろと。ほな、それは、言えませんか。持って行った人わかってるけども、それは言えませんかと言うてな。おれは真二と二人でや。

S その、そのこと自体がなんや、おまえ、完全におまえ、何か承知してますということや。

A そうそう。そやから、ところがな、証人でや。

S それは、おまえ、正当なやつやったら、誰か持って行きました言うで。

A そうそう。まあそういうことが、ものすごく多いわけや。それで手形割引、別段預金入ってるやつでも、入らなあかんやつでも、当座にも普通預金にも入れへんわけや。通帳に入ってけえへんわけや。ペケするわけや。割引やね。仮に六十万割引やつて、それで入ってくるわな。入ってくれば、ペケしたあるので、現金持ち帰りになつとるわけや。な。そないしてこんなもん、はつきり言うて……、その文が六十万円消えてもうたりな。で、そんなんがいっぱいあるわけや。で、帳簿なんかも、もう……、記入間違いと、こんなんばかりや。だから資料が……。

Y そやから、杉山さんも、もう気分悪うしはらんと。とにかく調べて行くたんびに、取引が、そういうあれが出てきよるからね。ほんまに。

S 別に、気分悪くもせえへんわ。

Y うちの兄貴は、とにかくもう、きょうでも出しなに言うたんは、とにかく、友達は、そうして杉山さんしかいてなかったんやと。今現在でも、今友達……。

S ええ。兄貴から電話あつてん。

Y お互いにさびしい気持ちはわかるけどね、こんな事で、やっぱり人間さびしくなりたくおまへんがな、やっぱり。これと……。

S 真二に会って大阪で話したるわ。

Y そうですねんや。そやからやっぱりちゃんとできたら、うちの兄貴でもやっぱり兄さんところへ会いに来るかもわかりまへんやん。うちの兄貴はそんな人間やからね。例え遠いところへ住もうがやね。

A そら、はっきり、杉山も納得せなあかんがな、だから一遍な、自分から一遍な、谷支店長に言うてな、それで一遍、話な、目の前でな、一遍したってくれてもええやん。ちよろつとそれで一遍。

S いやいや、おれはまた電話でもしてな、あの、僕かて、裏でこんなことやってる思われるのんもいややし。

A そうそう。いや、そんなんじゃなくて。

S 出ようや、何も、僕はもう、何も言いたない。

A いや、そうじゃなしにな、だからこんなんでな、わしに、あんた、おれは保証なった言うて、一体どういこうこつちやと。

S いや、その時は会わしてくれればいい。おっさんと。あのおっさんが手配したらええねん。おっさん、杉山出て来よるからちよつと出て来いや言うて。

A それでもええし。

S そのほうがええよ。

A まあどっちでも、あの……。何やったらそれが一遍な、向こうの支店長と、一遍自分と、真一と向こうへ行くよと。な。その足で一遍話にな。

S ほんで向こう、銀行やめたんは、桧垣だけか。やめたんは。

A そういうこと。

S あとはみなおるねんな。

Y あとみないてますのんか。桧垣だけいてませんか。

A 桧垣だけおれへん。結局な……。

Y ほか、皆、残ってまんねんな。で、向こう、いま偉いさん誰ですのん、兄貴の裁判した時に。うちの兄貴にちよつと知恵入れた。

A ああ、あれはあの、えっと、もう、ちよつとハゲた支店長や。

Y 他から回って来ましてんな。

A 本店から来よつてんや。そんなんでなあれや、結局本店のやつらはみな知つとる。何で知つとるか言うたら、財務局もみな入つとるわけや。一応流れはみな知つて。そら、向こうは銭あるからな、

抑えにかかってきよったわけや。それでまあ、表に出えへんかったでしょ。ところが今こうやってるやつが、ほぼな、八〇%な、でき上がってるのはでき上がってる。

何してもそんなんで裁判負けることないのはないねんけどな。いや、そんなんでや。そやからまだ向こうが突つ張つとるのは、自分が言うてるとおりで、なったことないやつ、そんなんかってに書いたりな。そういうようにして偽造しよつたらな、これはもう決定的なことになってきよるしな。そやから、またもう一遍あの、それと、あれだけ一遍、金伊三雄の手形な、誰が自分に持ってきよったか、もう一遍な、それをちよつと。

S 誰の手形。

A 金伊三雄のやつ。あの石本のやつ。

S ああ。

A 一遍それ一遍、あの、思い出しとってや。ひとつ頼むわ。まあ、忙しいとこやな、悪いけども。

Y ほな、食事でもしましよか。

S うん。

店員 ありがとうございます。（録音終了）